

よりでした。北海道に親戚がないので、お姑さんが若い頃お世話になったことのある音別を頼って行ったら、その頃は代がわりで、お姑さんの友達はおりません。私が見ず知らずの所へ、年よりと子ども五人を連れて行ったので、心細いかぎりでした。近所の物置を借りて、一か月ほど過ごしましたが、北海道の九月末は、朝晩は寒く、早く荷物がこないかと預かり証を持って、毎日駅に行き、駅員にたずねました。十日ほど通った頃、駅員が荷物は大泊港でソ連に押さえられた、と聞かされ、口増しに寒くなるうえ、この地で暮らすことはたいへんと思いい、お姑さんと相談して、宮城県のお姑さんの親戚を頼っていくことにしました。ところが、こちらは大勢の家族で、私たち七人がきたら驚かれ、それでも座敷を一室借りてお世話になりました。夫が樺太から帰るまでの二年ほど暮らしました。夫が帰ってきて、別の家の物置を借り、家族そろって暮らすようになりました。

それから間もなくお姑さんが亡くなり、子どもが三人ふえました。夫は北海道へ出稼ぎに行きましたが、仕事が終わる暇もなく、給料もきまって送ってこず、大家族を

養うことがむずかしく、育ち盛りの子どもたちにも苦労をさせました。中学を卒業した長男を毎日の食をのがれるだけでも良いと思ってお菓子屋へデッチ奉公に出し、次男は北海道へ、娘も卒業したので女中に出す等して助けてもらいました。娘が盆、正月の休みで帰ってくると米びつを見て「母さん米、麦あるの」と心配してくれるようになり、家計もいくらか楽になってきました。振り返って見ると、私は七十四歳、夫は五十五歳で早く亡くなり、今は長男夫婦が頑張っております。樺太から引揚げて、八人の子どもを手放すことなく育てました。

日本の敗戦と私の半生記

北海道 田畑喜一

ときに昭和八年二十七歳で樺太へ渡りました。積丹半島へ練が寄らなくなり樺太へ先行していた両親を支えるためです。更に祖父母の別居もあり、結婚適齢期である

自分のことも一切を自分でしなくてはなりません。父は十人の子の親としてすでに五十五歳です。頼り得る弟妹もなくここに決意しなれた測量夫の仕事も捨てざるを得ません。

樺太西海岸真岡郡蘭泊村の遠縁を頼りに二年の漁夫生活の末昭和十年祖父母も樺太へ移住することが出来たのです。かくして知己良友を得次第にふくらみまして三十二歳にして初婚を得ました。彼の地の浜辺では一番近いのが水産加工でした。もともと鯨の仕事はなれていましたから、折柄昭和十九年末に酒造用の大樽二十五本売物が出たのです。このときすでに日本は大東亜戦争の真っ最中です。産業報國という言葉があったほどです。米が大切なために酒屋が整備になったのです。私共としてはこの好機を逸すべからずです。よし買ったと手を挙げていました。一本千円ですから二万五千円です。五千円は払いましたが二万円足りません。

樺太産の椀材は初め一年濡って実用になりません。そこへいくと酒樽です。鯨は買えば必ずといって良いほど儲かるのです。塩蔵は人手も要しません。このとき山口

県人の海産商がいました。この先輩の掩護に依り銀行から借りることが出来ました。二万円を借りるのに九万円の抵当を入れました。

翌二十年一月召集令状を受取りました。昭和二十年二月一日午前九時舞鶴海兵団島根県部隊へ入隊せよというのです。よろこばなくてはなりません。入隊しました。すぐに自分は測量が出来ると思うもの手を上げよというのです。手を上げました。以上四人の者は測量班へはいれといわれて七か月留守中の四月母は鯨を買って十八本塩蔵しました。公定価格十貫目で十円の生鯨を三円で買ったのです。一本に千貫の製品が出来るのですから総利益が二万五千円です。一回に樽の代金をとってしまつたのです。これひとえに加工組合を主とする皆様の御厚意によるものと深謝しなくてはなりません。出征家族とあるので塩などを続けてくださったのでしょう銀行へは一回に払えるし遂に三つの灯を一つにし未知の地でここまでこれたとひそかに万歳をとなえた。三か月後日本が負けたというのです。日本も負けるものなのか、すべては現実だから、私財に半生の汗。純情一途の聖財とは

いってもそれはまた得られるが、母国の敗戦はどうなる。負ける前に止め得なかったものか。

満州へ行った妹はどうなる父母長男次男妻の実家はどうか。不安は果てしない。

しかしあまりの残念さに遂に留明の鯨によって再び樺太を見なければならぬと船の荷役などをしながら浜辺の瀬越しという所へ住むべく小屋を建てましたがしかし鯨はここへも寄らなくなったのです。寄らないからといって彼の地の様なわけにはいきません。すっかり窮迫してしまい五人の子に三度の食事も欠くことたびたびでした。しかし子供には泣いてはいけない悪いことをしてはいけない断じてこらえるのだ。アメリカの日本ではない日本の日本だ心を持って日本を築くのだ。しかし日本も負けたのか。

子供等は小学校だけで旅立ちました。役には立ちませんが悪いことをする子はいません。これは妻の素質によるところ大ですが、安心のもとでもあります。しかし一人になってみて借金が三百万ほどありました。これを返済すべく土木夫に雇われまして年は六十七でしたが、数

年たちました。人に迷惑をかけないようにと神を念じて一銭残らず返済の恵みをうけました。残余の五百万は美に八十二までの老人ホームへの滞宛料となったのです。

此の神様は青森県に本部のある大和山という日本の神様です。愈々体も弱りを感じようになりまして養護ホームという現在の緑風苑に入れてもらったのですが、あゝ戦後の施設か死の心配はなし料金は収入以内かくて飼われている感じが深いです。

旭川市は拓かれて百年にあたるそうです。

百年の稜線すがし馬肥ゆる

私という馬はこのすがすがしい稜線の山に太っています。今日もまた江差町の先祖を偲ぶ追分節がこの稜線の極楽境に流れることでしょう。

私の終戦前後

北海道 橋 詰 春 水

私は樺太生まれ、樺太育ちで職業は教育畑で小学校教